

〔萬葉集九歌〕天平元年己巳冬十二月歌一首并短歌

虚蟬乃世人有者大王之御命恐彌磯城島能日本國乃石上振里爾紐不解丸寐乎爲者吾衣有服者
奈禮奴每見戀者雖益○下

〔萬葉集十八〕庭中花作歌一首并短歌○中

之吉多倍乃手枕末可受比毛等可須末呂宿乎須禮波○下

〔源氏物語東屋五十〕かやうの朝ぼらけにみればものいたゞきたるもの、をにのやうなるぞかしと

き、給もかゝるよもぎのまろねに、ならひ給はぬこ、ちに、おかしうも有けり、

〔今昔物語二十五〕源頼信朝臣男頼義射殺馬盗人語第十二

頼義モ其ノ音ヲ聞テ○中未ダ装束モ不解デ丸寝ニテ有ケレバ、起ケルマ、ニ○下

〔孝義錄筑前十四〕孝行者儀三次

儀三次は穂波郡内住村の文七が三男なり、○中去年の春の頃より祖母の病重りて、起臥も心の

ま、ならざりしを、○中夜ごとくに帶をもとかず、そのかたはらに丸寝して、身のいたみを撫さす

り、○下

〔後撰和歌集春二〕ねやのまへに竹のある所にやどり侍て

藤原伊衡朝臣

竹近く夜床ねはせじ鶯のなくこゑきけば朝いせられず

〔足薪翁記一〕とりんぼう

とりん坊のみにあらず、總てぼうといふ俗語は、みな嘲りて添ふるなり、其種々、○中

朝寝坊 向の岡延寶八年 朝寝坊鶉うらみん草枕 笑夢

晝寝坊 富士石延寶七年 春の日を二日にしたり晝寝坊 見扣○中

長寝坊 同集○江戸本 朝顔のさこそ見るらめ長寝坊 不貫